校長室だより～燦燦～ №７００

だから

2023.2.9

「教員の常識は、世間の非常識」だいぶ前に、この言葉を知った。それ以来、肝に銘じている。実際、そうなのだろうと思う。だが、教員も少しずつ変わってきていることも事実である。今までのようにはいかない、変わらなければいけないという意識が浸透し始めている。教員は、世の中からどのように見られているのかという自己の客観視が重要である。

教員同士で話していると、「難しい」とか「前例がない」「今までやったことがない」となることがある。この後の「だから」の後に続く言葉は、人それぞれの思考パターンやシチュエーションによっても違うが、多いのは「だから、やめておこう」ではなかろうか。実際には、そうした言葉もなく、そこにいる面々が顔の表情で難しいということを伝えていることが多い。実現の可能性や本当に不可能なのかをほとんど考えないまま、せっかくのアイデアや明るい未来を手放している。

ところが、全く逆の言葉を聞くことがある。１０人に１人程度かもしれないが、「だから、やってみよう」という思考パターンをもっている人たちである。中には、さらに割合は下がるが、「だから、わくわくする、燃える」という人もいる。

変化の必要性がなければ、やめておこうでも問題はない。今までの学校がそうだったのかもしれない。変化しなければならないのに、変化したいのに、「だから、できない」では、いつまで経っても明るい未来はやってこない。

学校と関わったことがある事業者から聞こえてくるのは、他業種以上に教員は、難しいという理由で諦めがちなので驚いたという話である。わくわくする、燃えるまでは思えなかったとしても、少なくとも可能性を閉ざすような思考パターンには自ら気がついて軌道修正すべきである。

「だから、できない」ではなく「だけど、できるかも」である。教員から、やったことがありませんという言葉を聞くことは多い。これを言っていたら何もできない。何か新しいことを提案するときやいくつかのことから選択しなければならない場合は、それぞれのメリットとデメリットを説明するようにしている。判断するための材料を提示するのである。メリットが理解できれば、「だから、やめよう」にはならないだろう。難しい＝できないとは限らないことを理解してもらうのである。

教員は、自分の考えや意見をはっきりと言わない傾向があるかもしれない。それは、まわりとうまくやるために、気を使っているとも言える。だが、結論とその根拠や理由を相手に伝えなければ、物事は進まない。話し合っている途中で、「だから？」と聞いてしまうことがある。長々と話したわりには、肝心の結論がない場合である。たぶん、結論を言いにくいのである。あるいは、決断できないのである。

教員もようやく変わりつつある。これからは、結論をまず述べてから根拠や理由を説明するスタイルか、説明した後に「だから」に続けて結論を言うスタイルを身につけなければならない。意識は変わってきても、自分の考えや意見を表現できないのでは始まらない。「だから」教員はだめなんだと言われないようにしたい。